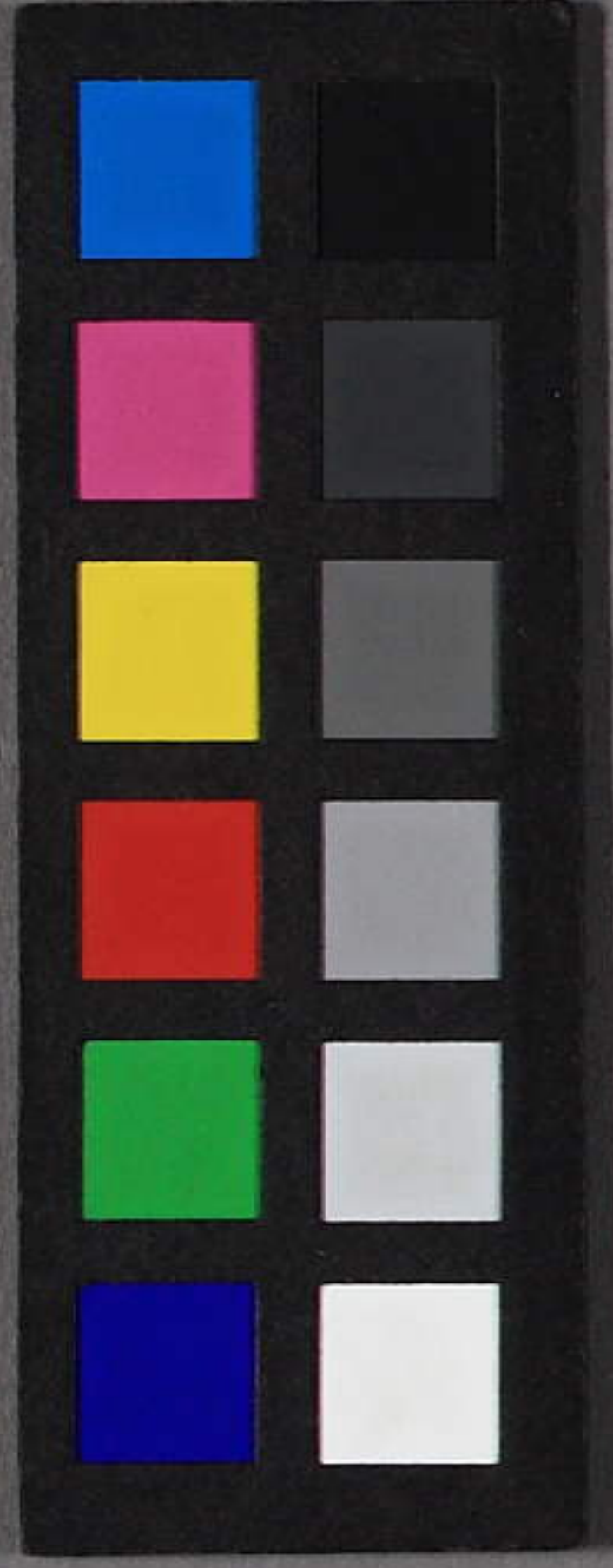
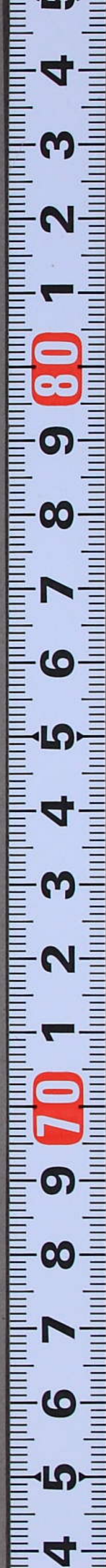
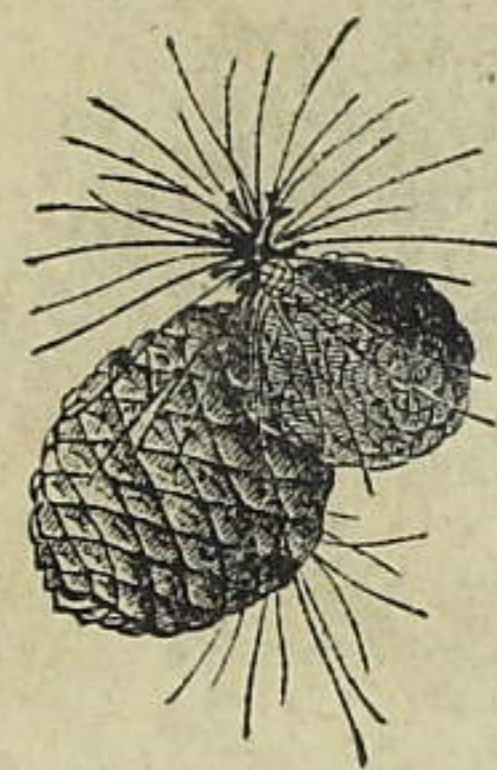


青年新體詩集







青年新體詩集

東京 新聲社 編纂

謫天情僊 野口寧齋先生題詞
竹柏園 佐々木信綱先生題歌
文學士 武島羽衣先生題歌
文學士 大町桂月先生序文

題詞

剪。紅。裁。綠。有。餘。思。
天。下。青。年。各。言。志。
居。然。悱。惻。芬。芳。意。
繡。口。錦。心。工。組。織。

謫天情僊

一。卷。看。來。盡。色。絲。
歌。中。新。體。且。稱。詩。
好。此。溫。柔。敦。厚。辭。
綺。才。要。問。果。推。誰。



Vertical text on the right page, possibly a library or collection stamp, including characters like '北京' (Beijing) and '孫' (Sun).

青年新體詩集のはしめに

佐々木信綱

雪をいたゞくたかねあり
雲をも志のぐはやしあり
千ぐさ咲きみつ廣野あり
かゞやく玉のうてなあり
やまのすがたも秀づれど

みづのながれも清けれど
あたらさかひを人とはで
むなしくすぎぬいく千年
松のをごとは志らぶなり
きませまれびとこの里に
こずゑの鳥はうたふなり
來ませわかうどこの里に

青年新體詩集のはしめに

武 嶋 羽 衣

かゝやきて錦と見ゆる大御代に

光りろへたる言の葉の花

序

人丸出で、和歌はじめて見るべく、巢林子出で、淨瑠璃はじめて見るべし。我新詩界はなほ草昧に屬す。人丸なければ、巢林子もなし。亦慨かはしからずや。笑ふ動物、泣く動物など、いへる例にならばむも、事ふりたれど、人はまた謠ふ動物なるべし。見よ各國の文學に於て、先づ萌芽したるものは、散文にあらずして、律語の詩にあらずや。現に小兒が感慨激越の餘、廻はらぬ舌に上るの聲も、自から節奏に諧へるにあらずや。管に蛙と鶯とが歌の伴侶なるのみならず、空をとよもすの雷、天も亦謠ふなり。巖にくたくるの浪、地も亦謠ふなり。而

して明治の人士は竟に謠ふこと能はざる乎。
科學者をして語らしめよ。宗教家をして説かしめよ。血
なく、涙なき走屍行肉の徒をして塵の巷に陸梁咆哮せ
しめよ。シルレルが地球の分配に於て歌ひけむ、地の上
に覓むる所あるは、詩人の事にあらず。錦繡の腸絞り盡
し満腔の熱血吐き盡して倒るゝも、亦宜からずや。
われ非才、詩を作ること能はざれども、志は則ち存す。あ
はれ詩を好むの士と共に、浮世の雲霧を排して、天花繽
紛たる樂郷に、ミューズの懷を攀ぢむ。謹んで青年新體
詩集の上途を餞す。

桂濱月下漁郎識

新體詩界の機運漸く熟し來れりと雖も、之が歴史を有する僅に十數年。
格調紛亂詩形粗笨未だ全く幼稚の域を脱すること能はざるなり。大詩
人を得、大傑作を見る、知らず何の日ぞ。想ふに偉人は搖籃の裏より求め
ざる可からず。吾人の囑望すべきものは只それ青年詩人なる乎。彼等は
燦爛の文情、流麗の詩形、見る可からずと雖も、活氣横溢、天真爛漫、ミュー
ズの神の爲に渾身の心血を灑き盡さんとするもの、固より利欲の巷に
彷徨する老大詩人と同一に談す可からざるなり。吾人の檄を飛して其
作を募集したる、豈偶然ならんや。
投寄せられたるもの殆んど二百篇、之を選擇して四十篇を得たり。校閱
全からず、配列當を失せるもの多かる可しと雖も、當代青年の技倆を知
るに於て、聊か補ふ所ある可き乎。
其着想は如何、其詩形は如何、之を細評する江湖其人あり、吾人は只吾人
の望に應せられたる青年諸子の好意を謝し併せて詩界の爲に益々盡
瘁せられんことを祈るのみ。

目次

地	夜	む	父	可	贈	戀	人	樵	夢	孤	片	夢	眠	須	み	渚	夜	花	
藏	寒	なく	憐	厭	の	の	か												
の	の	しら	の	世	の														
尊	床	生	子	子	人	衣	世	夫	か	猿	戀	ひ	兒	曲	屍	月	童		
.....		
塚	奥	金	片	更	田	剋	狹	峽	む	杏	山	余	袖	三	銀	朝	狹	廣	
原	原	子	岡	片	口	山			く	村	吹	語	華	峯	杏	熊	衣	瀨	
伏	幽	幽	湖	岡	孤				ら	子	子	梅	野	峯	男	生	舟	鷗	
龍	芳	花	南	月	雁	人	霧	月	の	子	子	軒	夫	生	生	生	舟	舟	
.....
一	四	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

片	は	鳥	露	飛	か	古	夏	小	賣	我	藻	民	秋	わ	秋	砧	お
羽	や	志	志	た	た												
の	ち	づ	づ	の	の												
蝶	風	啼	く	瀑	劍	場	夜	砧	兒	心	草	ひ	家	か	ち	葉	附
.....
長	露	櫻	長	半	吉	紫	北	次	中	微	鱖	長	稻	竹	湯	稻	中
眠	影	溪	眠	分	田	峯	雪	山	山	吟	洲	田	葉	川	川	葉	岡
.....
一	四	七	五	二	三	四	五	八	九	二	三	五	六	七	八	九	〇

墓畔の美人..... 櫻菴子..... 一

青雫新體詩集

新 叡 社 編

地 藏 尊

塚 原 伏 龍

はやく歩めと教へしも、
黄泉路へどてはたらちねの、
おもはざりけむあはれ稚子、
たいかしの實の一人して。

わたりの川をこえかねて、
左にめぐるなだらざか、
さいの河原に行きくれて、
またふりかへるもとの空。

かりの夢なる人の世を、

いつまで汝れは志たふらん、

胸のまよひのはれざらば、

岸のさゝれをいつまでも、

かぎらぬ數にひろへかし。

のたまはすなるみほとけの、

言葉のまゝに幼子は、

かよわきもろ手さしいで、

二ツ三ツ四ツ其石を、

つむや忽ち鬼の手に、

それもはかなくくづされつ。

* * * * *

こゝはわたりの川ほとり、

岸の柳にぬきかけし、

こゝらの衣にわがちどの、
のこし、袖もまじるらむ。

みちびかれたるみほとけの、

たのしき國も打すて、

迷ひ來りし其母が、

こゝろの暗こそあはれなれ。

左に折れて行くほどに、

雲井に遠くわがちどの、

かなしき歌のきこゆるに、

こゝろもそらに志たひ行く。

* * * * *

さいの川べの夕まぐれ、

石をたすくる母の手に、

志ばしねむりしをさな子は、

雲の志どねにゆめさめぬ。

たのしき國へいつのまに、

われら二人はのぼりけむ、

うしろの方ををろかめば、

光るばかりの地蔵尊ぞ、

あたりま近く立たしける。

夜寒の床

奥原幽芳

身にしむ夜半の秋風に、

萩もすゝきも亂れふし、

そほふる雨にうちぬれて、

鳴くや垣根のきりくす、

夜さむをなれもかこつらむ。

かすかに残るともし火の、

ひかり淋しき闇のうち、

おもひに沈む小夜ふすま、

あはれいとしの我妹子は、

今はたいかになやむらん。

腋をまくらのをさな兒は、

何おどろきしまろひ出て、

あたりのさまを見廻しつ、

やよ母上よはうへと、

聲もあはれによはふなり。

あはれいとし見やよ聞けよ、

なれか戀ふなる母うへは、

今宵はこゝにまさぬなり、

なが寝る折にくはしくも、

さとせし言葉忘れしか。

なれが忍へるは上は、

のかれぬことの起り來て、

けさしも里にゆきましぬ、

柿にさゝ栗いへつとに、

歸り來まさん明日はとく。

明日の土産を樂しみに、

疾くくぬふれいさあこよ、

いへは答へもいわけなき、

稚兒はさなからうなつきて、

またも夢路に入りけり。

* * * * *

あはれこの世をうき世とは、

誰かいひそめし言の葉そ、

山はみどりに水きよく、

ちりもけがれぬ山里も、

うきにはもれぬ習ひかや。

みのをはりなる水災も、

あつまの果にありきてふ、

海嘯も地震もあらされど、

時を得顔にばちるすの、

魔王はいたく荒れにけり。

きくもいまはし赤痢てふ、

悪魔は我家もおそひきて、

かよわき妹をさそひつゝ、

避病院にとつれゆくを、

止めで見おくる我こゝろ。

これそ名残とうち志ほれ、

見かへる妹をはけましつ、

心ゆるめそやよつまと、

いひつゝやをら振向きて、

志ほるか袖の血のなみた。

いと稚兒をは中にして、

結ひかはせし手まくらに、

添乳のゆめのむつまじく、

こゝはかりなる春風も、

たちまち秋となりにけり。

玉のうてなにあらねども、

綾の志とねにあらねども、

こゝろ隔てぬかたりくさ、

うらなつかしき撫子の、

うれしきふしも籠れるを。

見るもいふせき假小屋に、

片しく袖もひやけく、

夜たい露もる草むしろ、

夜寒の風にいぬもせぬ、

妻か心やいかならん。

こゝろつくしの看護にも、

なほ堪へかたき病氣に、

かしつく人もなく蟲の、

よわり果てたる今宵しも、

いかに苦しどかこつらん。

音なふ人も絶えてなく、

風なまくさきあはらやに、

あはれつれなきうき世そと、

訪はぬ我をしまつならん、

みどりせぬ身や恨むらん。

さはれ我妹子きゝねかし、

借にゆかんとちきりてし、

身をし惜むにあらねども、

おほし立てし撫子の、
花のあはれにひかされつ。

訪はぬは訪ふにいや勝る、

深きころを汲みわけて、

われな恨みそそれよりも、

はやく歸りていと見の、

笑顔を共にまもれかし。

いさや疾くどく歸り來よ、

あたし魔王はさそふとも、

ゆめな靡きそいと見は、

母よはよどこかれつゝ、

今宵も泣きて眠りしそ。

* * * * *

折しもすさふ夜あらしに、

まくらの燈火うちけたれ、

やみにまよへる幼兒か、

かりねの夢やふれけん、

乳房もどめて泣き出てぬ。

まさぐる胸も裂くること、

おもひみだるゝ斷腸の、

あはれをさらに打添へて、

また一志きりむら時雨、

袖もひぢよとそゝくなり。

むくら生

金子 幽花

母なし子

父様こちら 向いてたべ、
いやく嬢の とゝさまぞ、

嬢ばかり 可愛がらずと、
やりませぬ この父さまを。

父は二人の ちゝなれど、 可愛さは 變りはせぬぞ、
坊も嬢も いざねむれ、 大人しく 寐る子は善子。

哀れ二人の はゝなし子、 父おやの 愛をこめたる、
ひぢを枕に ねむりけり、 すやくと 右とひだりに。

みぎと左に 氣をくぼり、 父おやは 眠りもあへず、
目を暫叩き つふやきぬ、 慰さめむ 乳房もかなど。

我を見かへし わかつまを、 戀しとは ゆめ思はねど、
二人の稚兒を 見すてたる、 その母そ なほ忍はるゝ。

日本刀

やまと男の子が魂こめて、 鍛ひに鍛ひしつるぎ太刀、
霜のあしたに凍る夕べに、 錬りにぬりたる日本太刀。

鞘をはなては夏なほ寒く、 きらめき渡る稲妻か、
荒るゝ百鬼も眼くらみて、 逃げこそまどへ遠近に。

一度ふるへは忽ちそらに、 雲たちさわぎ風あれて、
大木を倒し草を靡けて、 さえきるものゝあらばこそ。

二度ふるへは忽ちまへに、 高きかばねの山を築き、
血汐はさなから小川と流る、 遮るものゝあらばこそ。

三度ふるへは拭ひし如く、 雲はれ渡り風なきて、
かゝやき出る天つ日影に、 きらめきあへり目もあやに。

父なし兒

片岡湖南

みやこ大路も冬の來て、

かれ木にさわく木からしの、

おどもの寒くふくる夜の、
十歳に足らぬいとし子は、
罪なき寝顔の愛らしや。
もどにて母が縫ふ衣は、
今は吾が子にかへし縫、
おもへば涙の種となり、
くるしき胸をおし静め、
わが子の顔をうち守り、
知るや知らずや幼子が、
いかなる夢や見しならむ。
外面をさして走りいで、
よくこそ歸り來ましつれ、
疾く入り給へいりませ』と、
母はわが子を抱きよせ、
こひしと思ふ思ひぬの、

闇に我子とたゝ二人、
晝のあそびに疲れけむ、
影ほの暗きともしびの、
夫にとてこそ織りつらめ、
明日きせて見む樂も、
糸の針目もみえわかず。
母は衣をうちときて、
あつき涙のひとまづく、
なぐさめ顔の片ゑくぼ、
やがて褥をはね起きて、
『父上加へり來ましゝか、
母もまちてそ坐すなる、
いへども影はなかりけり、
年は行かねど日頃より、
夢にや父を見しならむ、

解けてぬる夜も非れば、
逢ひ見し事もなきぞかし。
今は何處におはすらむ、
過ぎつるころの戦ひに、
かぜの便に聞きたるは、
御國の爲につくされし、
いと嬉しくぞ思ふなる、
世に頼母き子なりけり、
母がはなしを聞きたらば、
父もうれしく思さなむ、
母が子にてもあらずかし。
心を得しか起ちあがり、
劍をとりて走せいだす、
『とゞめ給ふな母うへよ、
今朝裏山のいくさごと、

母のはかなき夢にだに、
かばかり慕ふその父も、
いはねば汝は去らざらむ、
討れ給ひてなき身ぞと、
冬まだあさき頃なりき。
ちゝは本望はゝもまた、
幼けれどもなれはしも、
ちゝが心を受けつぎて、
父が御まへに誓へかし、
さらずば父が子に非ず、
いと懇にくりかへす、
かたへはなさぬ手遊の、
『やよ待て暫時何とする』
にくき支那兵盡してむ。
われは大將日の丸の、

旗をこなたの岡にたて、
てきの士卒うちなびけ、
手並を母も見たまへや』
母が育てし子なりけれ、
波路はるけきとつ國ぞ、
父の仇をばうたましと、
人となりたる其の時は、
身にまどはし、軍服も、
汝に與へむかならずよ、
なりて御國に盡せかし』
母の顔をば見つめつゝ、
其のまゝ母の膝の上に、
折から聞ゆる雁がねは、
そを待つ身にはあらねども、
外面のかたを見渡せば、

此つるきもて差圖なし、
つひに降參せしめたる、
『げに勇ましや斯てこそ、
されど眞の支那兵は、
いかで小兒の行るべき、
思ははやく人となれ、
父がはかし、その劍も、
乗りなされし馬もまた、
父に劣らぬつはものと、
といへは小兒は嬉しげに、
志ばし語もなかりしが、
ふたゝび夢を結びけり。
誰が玉章やかけて來し、
さすが心にかけりつゝ、
あく露まろく空すみて、

過○き○行○く○雁○の○列○さ○へ○に○
月○は○く○ま○なく○冴○に○け○り○。

數○へ○む○ば○か○り○十○六○夜○の○

可憐の母子

長野 更

月

秋の夕日の影おちて、
鎮守の森につとひきて、
暮れぬと告くる山寺の、
遊びつかれし里の子は、
節いさましく歌ひつゝ、
わらひ興づるその中に、
いそぎもやらぬ童あり、
つゝれの衣を身に纏ひ、
思ひありげの顔ばせに、

時もとむるむらからず、
聲噪かしくうち鳴けば、
鐘もかすかに響くなり。
『鶏の林に風たちて』と、
家路に歸へる夕まぐれ、
友をはなれてたゞ一人、
未だ十歳を越えざらむ、
短かき頭髮もかき亂れ、
笑も浮へず歌いははず、

つゆの袂を志ぼりつゝ、
折りく見ては口の中、

* *

軒も朽ちにし賤か家の、
開けて入りくる幼児は、
流石母には知らせじと、
日頃に變る今日のさま、
其が傍らに寄りそひつ、
『哀れ吾子よ如何にせし、
亦しも友とあらそひて、
包まず語れいとし子よ』
さすがはもろき幼兒の、
暫し應へはなかりけり。
うるみし聲もきれく、
坊の着物のきたなしと、

遙か過ぎ行く友どちを、
つふやく事や何ならむ。

* * *

破し障子をちからなく、
『只今』てふもうるみ聲、
顔を背向けて忍びなく、
母なる人はあやしみて、
頭なでつゝ手をとりて、
汝が様子こそ怪しけれ、
悲しき目にや逢たるか、
いたはる母の言の葉に、
よと許に泣き伏して、
なみだぬぐひて幼兒は、
『母様聞きぬ口惜しや、
日毎にあそぶ友どちの、

誇らぬ日とて更になし、
穢多よくと罵しりぬ、
今より仰せ違がはねば、
喃う母うへよ坊が身を、
坊は口惜し悲しや』と、
顔おし當て居たりけり、
子故に迷ふおやごころ、
身を切る如く悲しきを、
あらぬ笑をば造りつゝ、
常々はのいふごとく、
たとひ錦を着かざるも、
よしや着物は汚穢くも、
錦のきぬにいやまさる、
何のかなしき事やある、
頭なでつゝさとしたる、

今日もみなく口々に、
坊は口惜しはさまよ、
あはれ着物を購なひて、
いとしと思ひ給はずや、
はの袂に取りすがり、
焼野の雉子よるのつる、
聞きぬしはの心には、
志のび耐へて何氣なく、
『吾子よ何を啣つぞや、
心はひとの寶玉ぞかし、
心あしくばなにかせむ、
心たしくあるならば、
穢なき着物きたりどて、
聞き分たりやいとし子よ』
厚き言をばくみにしか、

幼ころのつみなさは、
明日は皆とは遊ばずに、
母さま數多進らせむ』
母の膝をばまくらして、
晝の疲れや出てぬらむ。

*

*

神をあざむく寝顔をば、
幾たび袖をまぼりけむ、
吾が背の君の永らへて、
家も榮えてありつるを、
浮世の風に背のきみの、
家も傾むきそめにけり、
斯る憂き目はなき者を、
便る身なきを如何にせん、
秋の月にもくもありて、

『坊は着物は欲しからず、
裏の小やまに栗ひろひ、
涙ぬぐひて笑ましがほ、
いつか夢路に入りには、

*

*

*

打ちまもりつゝ、母親は、
『思へば昔ぞ忍ばるゝ、
此世に居ますその頃は、
盈つれば缺くる世の習、
果敢なく成し其日より、
我背の君だに在しなば、
寄るべなきさの捨小舟、
春の花にもあらしあり、
儘ならぬこそ浮世なれ、

遮莫此身は如何にとも、
まだうらわかき稚子櫻、
浮世の風も知らずして、
世心知らぬ吾子にまで、
宿世如何なる因縁ぞや、
神もあはれと覺しなば、
守らせたまへ御佛も』
涙に言葉はとぎれけり、
頭をまたもなでやりつ、
草ばにすだく虫まげく、
もの寂しくぞ聞えける。

更に厭ひはなけれども、
蕾のはなのいとし子は、
心のどかにあるものを、
斯も憂目を見せんとは、
吾子に罪はなきものを、
せめては吾子の行末を、
願ふと謂ふもくちの中、
ゆめぢにあそぶ幼兒の、
夜や更けぬらむ月冴て、
芭蕉につゆの散る音も、

厭世詩人に贈る

田口孤雁

浮世の塵をさけばやと、

み山路遠くいほりして、
すめどなほきく鹿の聲、
哀れを身にぞ覺ふなる。

いつこかまこと仙人の、
隠家ならむそこさへも、

またも哀れはこもる覽、
浮世の塵はたつならむ。

世の人々よこの世こそ、
我身をいるゝ住所なれ、

いかで此世を果なみて、
苦しみわぶる事やある。

心まづかになからへて、
神の授くるそのまゝに、

いとも楽しく歌へかし、
いとも楽しく歌へかし、

いとも楽しく歌へかし。

詩國の花はさきそるひ、
天つ御國に句ふなり、

ミュージズの神は聲高く、
樂士の園にうたふなり。

戀衣

岡山 剋山人

針重げにも縫ふ衣の、
糸も亂る胸のうち、

別れし時の忍ばれて、
過ぎし昔を思ひ出の、
唯かの君ぞ慕しき。

後樂園の花さかり、
狂ふ蝴蝶を指さして、
われらがなかもかくこそど、

君ほい、えみし、面影の、
今もなほ目に浮ふかな。

旭河原の螢狩、

星と亂れて飛ぶなかを、

軽く團扇を蹴がへし、

君と捕へし樂さの、

昔を今も思ひいて、

心は闇に迷ふなり。

操の山の秋の月、

清き心をたぐへつゝ、

傾くまでも君と見し、

秋もありしを今のはや、

其も昔となりけりな。

兒島の灣の枯蘆や、

歸るつり船影さむく、

驚舞ひさがる夕まぐれ、

君がめでにし雪景色、

手すりに倚りて見る度に、
戀しきものはむかしなり。

今は山河隔りて、

同じ月日を見ながらも、

たゞ一言も玉章の、

外に言ふべき由もなし。

夢にうつゝに戀衣、

縫ひつゝ思ひ寢るゝを、

知るや都のあはれ君、

君の歸りのなどおそき。

人の世

吉備 狹

霧

世をうしと今はた言し、
まつの風たにの清水に、
なかくにあさき心根。
石ふみに名のみ残して、

塵の世をいとひ迷ひて、
心をはすますといふも、
苔の下ふかくかくれて、

千早振かみの御くにに、
世の塵は身を離るべき。
現身をうつさぬかぎり、

くさの庵　こゝは暫らく、

神の世に　行手のうまや、

憂き事も　樂しきことも、

草まくら　旅路のならひ。

今さらに　何をか言はむ、

哀れ世の　旅ゆくひとむ、

山あらは　越えて進みつ、

海あらは　船をこそやれ、

旅といふ　名の同しくは、

人こゝろ　さかしきまゝに、

世の波風　荒しといふも、

凌くへき　術なからめや。

樵夫

峽

月

向ひの峰の木の間より、
ふもとの寺の鐘の音も、
重荷おひつゝ歸るさを、
谷の岨路を月影は、
都のひとはいひにけり、
身にくらぶれば中々に、
重しともなき重荷かな、
妻木にそふる柴人の、
山また山のちくさへも、
浮世の風のすさぶとは、
峰より峰にわけ入りて、
いほにあまれば中々に、

影まろらかに月は出ぬ、
吹く夕風にたぐひきて。
急げと告ぐる鐘ぞうき、
心せよとや照らすらむ。
哀れ浮世のなげきこる、
うらやすけなき柴人ど。
紅葉かざして花折りて、
心のうちのゆかしさど。
背におふ柴の志はく、
知ぬ人こそうたてけれ。
背おひ歸れる妻木のみ、
立つるはほそき烟なり。

糸竹きゝて都人の、
 荒熊吼ゆるやま中に、
 あのがまにく折つれど、
 今宵一夜をかざりにて、
 夕うれしき都路の、
 煙ぞあはれ夜かけて、
 松かぜならぬ琴きゝて、
 ほどり長閑に住む人の、
 こは我ながら不覺なり、
 御代に生れし幸あるを、
 足とくいざや歸らまし、
 きよき心のうまけさに、

めづらん月をいくそたび、
 風におなゝき眺めけむ。
 この紅葉もさくら木も、
 翌は誰か手に渡るらむ。
 月さへ曇るやどごとの、
 我等がこりし妻木なる。
 あやぎぬまとひ埋火の、
 身ぞ中々にうらやまし。
 上見ぬ笠ももちながら、
 何をか嘆くことあらむ。
 色こそなけれわが妻の、
 けふのうさをば拂ひなん。

*

*

*

*

*

心にもなき柴びどの、
 さえ行く月に遠やまの、

歌は微けくなりはてし、
 ましらの聲ぞ聞ゆなる。

夢か現か

むくらのや

松杉ひのきむらだちて、
 霧の絶間にほの見ゆる、
 路行暮れし旅ころも、
 佗しげに鳴ふるうの、
 半崩れしつひぢには、
 うらかれなからみつるも、
 柱かたふくみかどべは、
 二玉の姿あかすがに、
 み堂は雨のもるまゝに、
 半はくちてきざはしも、
 見る目さびしき山のおく、
 寺はなにてふ寺ならむ。
 片まぐやどもあらむかど、
 聲を案内に來てみれば、
 所えかほにはふつたの、
 さすがに秋の色みえぬ。
 千萱茂りてとぎせども、
 いと長くもたちませり。
 つきの簀もおぼしまも、
 あどろが下に埋れたり。
 守る僧だにあらざれば、
 詣來る人もあらずして、
 狐たぬきのふしどとや、
 なりはてぬらむ徒らに。

押がまに／＼開くなる、御どうの扉ひきあけて、
 内陣ふかくたちいりて、みづしの下に額づけば。
 いづこの壁の隈ならむ、いづらの草の蔭ならむ、
 いどいはたありさま／＼に、なき出る聲の哀れさに。
 すゝろ昔のひと戀ひて、物もふなべに怪しくも、
 虫のなく音は天つ女の、糸竹のねときこえつゝ。
 あたり耀き目もさやに、むらさきの雲棚ひきて、
 風薫るよと思ふ間に、佛そちかくたゝしける。
 をろがむ儘に目もくれて、膝折ふせて拜がめば、
 情もふかき御手のべて、我みだれ髪なでながら。
 のう懐かしのあが君よ、何をのゝぎています覽、
 あをは見忘れ給ひしか、床しの君とよぶこゑに。
 怪しと見ればこはいかに、我を慕ひて思ひわび、
 つひにうせにし其君の、まさしき姿にありければ。
 今はた答へむ言をなみ、千々に思をみだしつゝ、

心びれをれはかの君は、物やさしげに言ひけらく。
 哀れあが君きこしめせ、黄泉の鬼にはたかるゝ、
 今の我身のくるしみは、誰故にかとおぼすらむ。
 他に契りし人ありと、知らて染にし戀ころも、
 たちはな鳥の忍び音に、泣つゝ袖をまぼりしが。
 岩手の森のいはでのみ、日をふるとの切なさに、
 千々の思のひとすちを、涙にまめてものせしが。
 待てど返りを給はねば、届かざりけむとよとて、
 又まゐらせぬ三度まで、されど答はなかりけり。
 恨むかひなき情なさに、思はじとすれば又更に、
 君戀しさのいやまして、只にやむべき術もなく。
 宵闇まざれきみが家に、さまよひゆきて覗へば、
 あな情なやそのゆふべ、妻迎へしていましたり。
 頼み甲斐なきあが戀の、行衛もまらに氣もくれて、
 亂れし後のあがことは、さやに夫とも分かねども、

火かけをくらき闇の戸に、
 いとましげなる一聲を、
 白なみさわぐ川のへに、
 月つきにすかして見しとを、
 君の浮世にあればこそ、
 炎えんのうみに焼かれつゝ、
 君し黄泉に來ましなは、
 いざ案内せむ志での山、
 促うなががしたつる其さまに、
 怪あやしくもまたなき妻の、
 やよ待て女志ばしまて、
 誘いざなひはゆくそあなにくや、
 加か黒き髪をふりみだし、
 打うすまふよと見る程に、
 あかあつつききささむむきき秋あき風かぜに、
 御ごどどううのの扉かどききししろろききて、
 外そと面にへいて、眺ながむれば、
 有あ明あつつききののかかげげああろろく、
 軒のきののああかかああににううつつろろへへり、
 今いまもかすかに覺ゆなり、
 血ち汐しほまみれし秋あきの志こころも、
 今いまもかすかに覺ゆなり、
 劍けんのやまにつんさかれ、
 なほも心ののこるなれ、
 妾めかけかたまものどむなり、
 いざゐて行む立ませと、
 心こころも添そはでをのげば、
 天あまつ空そらよりかけりきて、
 夢ゆめは跡あとなくさめにけり、
 夢ゆめは跡あとなくさめにけり、

いと悲しくなる儘に、

外面にいて、眺むれば。

有明つきのかげあろく、
 千歳の松のひまもれて、
 軒のあかあにうつろへり、
 さすがに水は清くして。

孤 猿

杏 村 子

あやしき衣きぬを身に纏まとひ、
 情なさけけもあらしむちの下、
 日毎ひごと々々のうきつとめ、
 儘ままならぬこそ悲かなしけれ、
 山やままた山やまのああくくふふかかく、
 浮世うきよを外そとにははささままど、
 流れは今いまもああややみみなく、
 いとけなかりしその昔むかし、
 さ枝えだのどこに遊あそびつゝ、

歌うたふねにつれ舞まひ躍なり、
 かひくゝりつゝ昨日きのうけふ、
 のかれん術わざもああらら繩なはに、
 清きよきなかれの谷やまかけに、
 すみぞ慣なれたるその影かげの、
 昔むかしのままになながるらむ、
 我われは母ははさまに抱かかれて、
 日ひねもす水みづを眺ながめては、

さちある身とぞ思しに。
 なさけを知らぬ山賤の、
 此世をあとに母さまは、
 我が行するを案しわび。
 わを抱き上げつくぐと、
 くちにいでえぬ情ある、
 目に見る如き心地して。
 かた時あらずつきまどふ、
 昔なからのたにかげの、
 其身の嘆にかきくれて、
 まもとの下に舞ふふりを、
 をかしといひて笑ふなり。

つゝの響ともろともにも、
 あはれ消なん今はにも、
 眺る目よりせきかぬる、
 あつき涙ぞいまもなほ、
 身のうき雲の拂はれて、
 さ枝にいこふ折もがな。
 哀れ寢れしみなし子の、
 里のわらべら集ひきて、

片戀

山吹子

我戀は何にたどへむ、

もしほの煙風をいたみ、

下にこもるときみ知るや。

わか戀は何にたどへむ、

深山のわらひ人志らず、

萌えてくつると君志るや。

我こひは何にたどへむ、

えぞか島根の千重の雪、

積れと解けぬと君志るや。

あはれ其もしほの煙、

風もなきつゝ立のほり、

霞とたゝむはいつならむ。

あはれその深山のわらひ、

戀しとちもふ人の手に、

折られむ春はいつならむ。

あはれ其千重の老ら雪、

長閑けき君か光にあたりて、

とけ行く春はいつならむ。

夢のおとなひ

余語 梅軒

夜はほの暗くふけゆきつ、

燈火くらく消えのこる、

窓に吹そふ風の音も、

もの悲しくも身にそまむ。

人なき闇にたゝ一人、

更ゆく鐘をかぞへつゝ、

思ひに沈むその中に、

いつしかわたる夢のわた。

いづこともなく分け行けば、

雁の羽風に色かはる、

ながめ寂しき浅茅原、

草葉もなべてあはれなり。

老ほるゝ萩の下風に、

虫の鳴く音もうらがれて、

うき身一つのあはれさに、

涙のみこそほれけれ。

折から東の山のはに、

隈なき月はほのめきて、

さらでも寂しき此野邊の、

哀はさらにもさりけり。

松の木の間に見えわたる、

一むらすすいきかきわけて、

つきの影しく浅茅生を、

わけゆく人や誰ならむ。

わなしく胸をおし静め、

いふかしみつゝ跡追へば、

ありし昔にかはらざる、

床しの君に似たりけり。

さはいへ君はさきつとせ、

はかなく露と消えにしを、

今世にあらむとぞなき、

怪しやさても怪しやな。

千々の思ひに亂れつゝ、

近か寄る野路の一筋に、

見ればまがわぬ面影に、

さては床しき君なるか。

今はにもろ手をとりかはし、

いつ相見んとなげきてし、

床しき君のつゝがなく、

ながらひませしうれしさよ。

さはいへ君は年頃の、

覺束なさにわびはてし、

我をうちすてたゞ一人、

いづくの空にいましたる。

たえし契りと知りつゝも、

日ぬもす物を思ひわび、

露の床邊に見る夢も、

君の面影去りやらで。

あはれをさそふ秋の夜の、

露のみだれのせきかねて、

神にめぐみをみしめ繩、

またの逢瀬をいのりけり。

思ひかけずも逢ひ見ては、

いく夜もつもる恨みさへ、

いはんとすれど口こもりて、
もらしかねたるかこち言。

さはさりながらいつしかに、
夜もあけ方になりなむを、

昔かたりをなしつゝも、
いざや歸らん手をとりて。

たどる行方をなかむれば、
夜霧薄れてあら家見え、

賤かうつなる小夜砧、
風のまに／＼聞えけり。

其ね漸う高まさり、
耳元近くなるまゝに、

打驚けばこはいかに、
身はかりふしの夢枕。

ゆかしき面影かききえて、
ゆかしき面影かききえて、

かたみどのこる萩の聲、
尾上のあたり小男鹿の、
妻戀ふ聲もあはれなり。

眠れる嬰兒

袖華 野夫

あるか無きかの春風に、

野末の梅もちりそめつ、
森のあなたの水車、

楽しく歌ふ鳥のねの、
手にとる如く聞えけり。

搖籃にゆらるゝ嬰兒の、
魂は何處に遊ふらむ、

栗を拾ひし彼の山か、
魚を掬ひし此河か、

戀しき母のふどころか。

苔の花の口もとに、

折々寄する笑の浪、

塵に汚れぬ面容は、

天つ御國に在すてふ、

神の姿もかくやらむ。

針を走らす母親は、

笑ふに連れて打笑ひ、

憂を忘れてまばらくは、

幼ころに返るらむ。

須磨の曲

三 峯 生

沙まろし、

磯邊の松は古にけり、

古りし松か枝朽んとす、

久方の、岸うつ波はまつかにて、

まつけき風の音さびし。

み空に月は出でにけり、

千里の外にくまもなく、

沖の小島のかず見えて、

蟹のともし火二つ三つ。

草まくら、

旅寝はうしと聞にしも、

須磨の浦わの夕まくれ、

浮世よそなる此けしき、

誰か哀れとめでさらむ。

あな哀れ、

たまのみ船に梶どりし、

殿上人やいまいづこ、

心なきさのあらしかな、

心ありけの月のいろ。

うち合す、

太刀の鐔音たえてより、

松風のみぞものかなし、

折しも海人の子等や吹く、

月にすみ行く笛の聲。

みづく屍

銀杏生

上

變りはてたるふる里の、
 人もたからも家くらしも、
 白波のみぞたちさわく、
 歸る吾が身を待附けて、
 今は何處にましたまふ、
 たゞ面かげの浮ぶのみ。
 おとなふ者も更になし。
 めぐり合ひたる村人に、
 沖の方のみうちながめ、
 語りあへぬか言得ぬか。

中

吾がやのあたり見渡せば、
 一夜のほどにかげ失せて、
 津浪のあとのすさまじや。
 何時も笑顔の父母や、
 なつかしかりし兄弟も、
 志たしかりける友どちの、
 噫いかにせむ如何にせむ。
 問へ共問へどいかなれや。
 寄せくる波をにらみつゝ、
 誰もこたへは有らぬなり。

浪かぜ荒きうなばら、
 國のみいづを顯せる、
 ほまれの上にも長くも、
 ふる里人にむかへられ、
 其の夜なりけり父母は、
 この幸福にあひたるは、
 うち喜びてのたまひぬ。
 其の夜の様を思ひいで、
 その面かげは今もなほ、

下

こゝろ安くもおもひつゝ、
 あほみ軍に志たがひし、
 勳章をさへたまはりて、
 もてなされしは去年なりき。
 世に長らへしかひありて、
 嬉しきことのはみぞと、
 されば軍艦にかへりても、
 なぐさむ事のおほかりき。
 忘れぬものをはかなしや。

われのみ獨ありとても、
 はた嬉しくもあらぬ也。
 撃ちまづめたる荒海の、
 さはさりながら我も亦、
 世の有様を思ひ見るに、

樂しきことはあらざらむ。
 彼のたゝかひに敵艦を、
 底こそいまは戀ひしけれ。
 日本男子の一人なり。
 事あらむときも遠からじ。

をしからぬ共今志ばし、
あゝ涙には朽ちざらむ。
たぐひ稀なる功をたて、
兄弟もみなよろこばめ。
護らせたまへ御魂たち、
おもひかへせば中々に、

捨つべき身かは徒に、
嘆きの淵にも沈むまじ。
名をあげてこそ父母も、
水づく屍とさためむを、
心づよくはおもへども、
悲しかりけり嗚呼かなし。

渚の月

朝熊男

湯あみしをへし衣手を、
たそがれ時の浦つたひ、

すい吹く風にさそはれて、
清きなきさに出てにけり。

人のけはひに驚き、
裳すそにさわく幾そたび、

横さらひゆく蟹の子の、
あどろかされぬ吾も亦、

岸の岩根に腰すゑて、
月を待つまの hands さひに、

沖のいさり火 數へつゝ、
いてそよを笛 すさひなん。

心の静に吹きなせは、
琴のひききに かよふなり。

峯の松風 あとなひて、
波のつみも あはせつゝ、

潮はみちきぬ、夜もふけぬ。
月は今こそ すみのほれ。

空と海との けぢめより、
黄金の波も 湧き立ちて、

大海原の そとふかく、
雲のびんつら うつつらん、

龍の宮居に いつかれて、
こやをと姫の ます鏡。

浦回の磯に 舟よせて、
月にうかれて さす棹の、

夜釣なすらん 海の子も、
なげやりぶしに 歌ふなり。

波にその鳥の。飛ひ島に。鳴きつれて、
波間に浮ぶ。飛ひ島の。六つ五つ。

渚を洗ふ。浦波は。よせてかへれど。忘れにけりな。歸にさを。行きはてい、

月にうすれし。いさり火は、あきふく風にかつ消えて、
みきはの葦の短か夜は、はや白々と明けそめぬ。

夜半月

狭衣生

夕ぐれ。凄き真葛原、
かぬの音。牙ゆる華頂山、
孤客まづきく風の聲、
あはれく。

たれを松むしくつわむし、
ふりすてかたき鈴蟲の、

なく音にふくる夜半の月。

萩桔梗秋はいろく花の野邊、

すがる白玉つゆの玉、
孤客まづきく風の聲、

たが玉章のことづてに、
あはれく。
雲井をわたる雁かぬの、
なくねにふくる夜半の月。

花賣る童

廣瀬 鷗舟

空に残れる月かけを、
袖の志づくか朝露か、
笠にうやれし。てわれくれば、
やれし。衣も志めりつ。

そゝろにうさの思はれて、
 思へば去年の秋のくれ、
 入相告ぐる山でらの
 かへらぬ旅に出ましぬ、
 細き烟をたてつゝも、
 送りむかへて一年の、
 * * * * *
 あゆみも遅き野邊の路、
 杖とも頼みし父上は。
 鐘の響きと消えうせて、
 残るはわれとは、上と。
 流れてはやき年月を、
 むかしと今はなりにけり。

櫻にかすむ春の朝、
 花にあくがれ月にゑひ、
 樂みいづもたえざらむ、
 いやしきわざを營みつ、
 朝な／＼に程とほき、
 都の巷に來て見れば、
 こゝにかしこに群りて、
 * * * * *
 空さへすめる秋のくれ、
 風流つくせる世の人の。
 それに引かへちのが身は、
 今は花うる身となりて。
 道ふみこえてやう／＼に、
 口さがもなき京わらべ。
 われをながめて笑ふなり、

花うる聲のいやしとて、
 のゝしる聲は聞ゆれど、
 都の人はたのしめど、
 さはれ浮世は秋の空、
 そしる人こそおろかなれ、
 いかで空しく朽ぬべき、
 行末どほくうつろはぬ、
 なき父上に手向けはや、
 * * * * *
 うしろ姿のをかしとて。
 思ひの志げきわれなれば、
 花なてしこの色も香も。
 など我のみはうかるらむ、
 かはるは人の常なれば。
 我身の末はうもれ木と、
 心の駒にむちうちて。
 ほまれの花を手折りきて、
 忘れぬ御墓の其前に。

片羽の蝶

秋田 長 眠

春日のどけき野に出て、
 思ひもつるゝ胸のうち、
 どぞしのひもとときそめて、

小川のあたりとめくれば、

立つさゝ波にゆられつゝ、

流れてきけり蝶ひと羽。

流れ行く身の末遂に、

さかまくふちにうち沈み、

底のもくづとなりぬども、

ありて甲斐なき現し世に、

はかなき骸を残さなむ、

上なき耻にはまざるらめ。

片羽の蝶よなげきそよ、

全きこゝろのたふとさを、

え知らず人はひたすらに、

吹けば消ぬべきさかえをば、

うはべにかざりわれのみと、

此世にほこるおろかさよ。

露のひぬまをたのみつゝ、

月にあぐかれ花にゑひ、

世に爲すともあらずして、

あたら榮枯に狂ふめり、

朽ちてあとなき草葉をば、

いかにおもひてあだし人。

蝶よ行けかし流れつゝ、

とゝむる川の老からみも、

なくてなかく、幸なりや、

宵は真如のかけやどる、

月のみやこはみなそこに、

なれのくべきをまちぬらむ。

蝶よいづこと打見ゆる、

流れの末はけふりつゝ、

ふちのかなたに立つ波に、

はねなき蝶も消え行きて、
夕ぐれさまの風さびし。

はやち風

東京 露

影

寄せてはかへす荒波の、
白真砂地にまろひ入り、
あやしき琴の聲ぞする。
日ははや西に傾むけば、
白帆かゝけて船歌の、
岸邊をさして歸るなり。
斯かる折りしも童子の、
緑のかみをうなたれて、
深き哀れをたゝへつゝ。
沖邊遙かに見まもりて、

岩にくたけてゑら玉は、
磯馴の松のこずゑには、
うみを家なる舟子等は、
ふし面白くうたひつゝ、
いはほの上に唯ひとり、
潤む目元にいひまらぬ、
『やよ父上よ父上』と、

哀れに瘦せしのと元も、
涙にくるゝぞ哀れなる。

* * *

磯邊はなれし一漁村、
門邊に洒すうをあるや、
これや舟子の家ならむ。
家の中なるつま子等は、
夕けの仕度いそかしく、
烟もいとゞにきはひぬ。
七つ八つなる幼児が、
沖邊遙かに見さけしか、
家の中へとはせ入りつ。
そのおどろきも道理や、
見る／＼中にかきくれて、
篠つく雨のものすこや。

裂なむばかり叫ひつゝ、

* * *

よそめはかなの軒續き、
ろかひの數も多く見ゆ、
夫のかへるを樂しみに、
雲井遙かに立ちのぼる、
父の歸りを待ちわひつ、
『あな』と一聲おどろきて、
いまゝで晴れし秋の空、
あらし吹きたち浪怒り、

わらべは母にいひけらく、
この大風を如何にして、
吾家に歸りたまふらむ。
されは母上我れはいま、
歸り給ふを待ちまさむ、
幼ころの志ほらしや。
止むるも聞かで幼兒は、
木の葉に似たるいさり船、
いつこ行きけむ影もなし。

* * * * *

明るあしたは風なきて、
疊かさの如くなりたれど、
遂に歸らずなりにけり。
雨ふる夕べゆきのあさ、

『あれ母さまよ父上は、
あの荒波をいかにして、
磯邊に行きて父上への、
母上さらば』と親思ふ、
波打つ際に來て見れば、
沖に志ばしは見えたるが、
浪走つまりて海原は、
哀れかの子のまつ父は、
わらはべはいつも磯に立ち、

父よ父よとさげべども、
松吹く風となみのおと。

答るものはあなあはれ、

鳥 夜 啼 (意譯)

櫻 溪 千 里

日も西山に傾むきて、

ねぐら求むる群鳥、

聲も隣れに鳴き叫ぶ。

機の手とめし美人は、

夕暮なりと悟りけむ、

憂きにたへせぬ姿にて。

やをら窓をば押しあけて、

西の空をば眺めつゝ、

花をあざむく唇は。

何かこつらむ獨り言、

暫しが程はたゞずみて、

うれひありげの其風情。

雨にぬれたる海棠や、

風になやめる櫻花、

緑またゝる青柳の。

それにも増して哀れなり、

そも如何なればかく計り、

小さき胸を痛むらむ。

知るや知らずや我が背子は、

君と國とにつくさむと、

雲をへだつる幾千里。

遠き異國に旅寝して、

霜の朝や雪の夜も、

戈とり守りおはすとよ。

歸ります日をこがれつゝ、

空しき闇にたいひひとり、
かすけき燈火まもりみて。

指かゝなへて待つ身には、

胸はりさくるばかりにて、

いと、うきをば増鏡。

くもる涙の雨やさめ、

ほすよしもなき今日今宵。

露志づく

長眠子

わかばかげ

ふりにしあめは散る花の、

涙とばかり見しほどに、

いつしか茂る若かへで、

名残の露をたゞへつゝ、

月を浮ぶるすゝしさを。

不如歸となけど杜鵑、

あかぬながめを如何にせん、

玉とてり添ふひとえだを、

たをらば月の怨むらん。

一夜をこゝにあかさなば、

つゆの袂と志めりつゝ、

あくるあしたはひと故に、

ほすさへつらき濡れ衣を、

きせらるゝをば如何にせん。

ゑむおもわ

末をたのみしなでし子に、

別るゝとのうれたさよ、

惠の露もあすよりは、

仇し人手や頼むらん。

頼むこゝろはかはらぬも、

たのまるゝ身のかはれると、

志らでやあさも夕くれも、

あまねからずとおくつゆに、

つきぬうらみをかこつらん。

さこそと志のぶわが胸の、

深きおもひをさどらずて、

けさのかどてを見送りつ、

ゑむかおもわのいとしさよ。

わかれ

あはれ幾日もかくあれど、

思ひしことの甲斐なくて、

別るゝけさの悲しさよ。

とむる便かとなるならば、
あすはさみだれ降らせばや。
同じ流れを汲むども、

かりのえにしはあるものを、

わけ行く道はおなじくて、

おなじ雲井に月かけを、

山川へたてゝ兩人見む。

あかぬ袂をふりきりて、

よし今こゝにわかるゝも、

かたみに誓ふことのはり、

幾よろぢよもかはらじな。

飛 瀑

半 分 子

峰よりおつる志ら糸の、

みたれてはやる早瀬川。

涼しき秋の色見えて、

浮世の塵の影もなし。

木の間をくゞる水沓えて、

音もうせぬるはやし陰。

つなきしたま靈の緒もたえて、

そよふく風に肌寒し。

かたみの劍

吉 田 天 涯

いへにのこれる つるぎたち、

血志ほにさびし あとみても、

父のいさをぞ あふかるゝ。

みたまこもれる つるぎたち、

ぬきもてすゝむ ひかりには、

なひかぬ草木も

あらさらむ。

きみかみために

すゝむわれ、

くじのほまれを

みにおひて、

つるぎとにもに

たふれなむ。

くじにつくしゝ

ますらをの、

ちしほのいろも

さらにもた、

ほまれとともじ

まさりなむ。

古戦場

紫峰樵夫

日は西山にかたふきて、
何處の寺の鐘ならむ、
あはれ此野やいつのよか、
草むす屍はをちここに、
松の嵐は今もなほ、

夕さひしき廣野原、
諸行無常の聲すなり。
戦の庭のあとならん、
折たる劔は右左。
鼓の音にさも似たり、

なびく尾花は今もなほ、
討死したる兵士の、
鬼火かあらぬか夕月の、
討死したる兵士の、
聲かあらぬか草村の、

並立つ劔にさも似たり。
残る思のなほもゆる、
かけにきらめく草の露。
つきぬ恨をかこつらん、
かけになくなる虫の聲。

夏の夜

加賀北雪生

夜は深かし

渚のさゝ波まづけくも、

うかへる影をみたしつゝ、

池の上渡す橋の上、

月をふみつゝ夕すゝみ。

ありし世は

われ父上ともろ共、

淺の川瀬の夕涼み、

楽しく見たりし此の月も、

今は恨の種そかし、

あはれ思へはむかしなり、

いにしきさらぎ今日の夜に、

都の空のつきかけに、
父上戀し今宵しも、
われおほしつゝおはすらむ。

想ひのはしる古里の、
あなし御空の月を見て、

あなうたて

折からすめる月影は、
光たちまちかき消ぬ、
わが古里の音信か、
逢ひ見る如き心地して、
見ればうたてや情なや、
かつて見まらぬ水莖の、
見る眼おほろにかすみつゝ、
夢かうつゝかまほろしか、
『年ごろ日頃文の庭、
わかみはそもや何ゆゑに、
かゝる悲しきなげきをば、

俄かにおほふ村雲に、
をりしも來つる玉章は、
こひしき父にまのあたり、
ともしに近く居よりつゝ、
戀しき大人の筆ならで、
中や如何とよみ行けば、
涙に文字もわきがたし、
さめぬは夢にあらざるか、
學ひの道にいそしみし、
遠き都に來たりしぞ、
なさん爲にはあらずして、

やがて歸らむふる里に、

錦かさりて父上に、

見みへむ爲めの業なるを。
物のふみにもあると聞く、
中々あらしやみもせず、
先立つ父こそうらみなれ』
思ひせまりて見わたせば、
こゝろありげに折々に、
下界の我をてらすなり、
影にかはらぬ影見れば、
うかぶが如き心地して、

静かならむとする木々に、
誠つくさむ子をおきて、
雲かくれせる月かけは、
雲のとはりをかゝげつゝ、
あはれ月影そのかみの、
世になき父のおもわさへ、
胸のおもひの雲ふかし。

折しも雲のいつ方ぞ、

一と聲血に鳴く子規、

あはれ血になく其思ひ、
いかてか汝なれに劣らめや、

思ひにくるゝ其うち、
あくるに易すき短夜の、
月は雲井にかけふけて、
あけ方近くなりけり。

小夜砧

次

郎

軒の松風おとたえて、
遠里小野のさよ砧、

月影寒き窓の中、
とぎれくゝに聞えけり。

次郎は耳を敬てゝ、
母様教へて給はれ』と

『アレあの聲は何ならむ、
母にむかひて問ひにけり。

裁縫の手をとゞめつゝ、
『あれは貧しき賤の女が、

母は次郎にいひけるは、
月に衣擣つひゞきなり。

これも誰が爲皆おのが、
單衣一つも重ねさせ、

身故にあらでいとし見に、
寒さ見せじの業ぞかし、

ヤヨヤ次郎よ思へかし、
夜寒も志らず思ふまゝ、

厚き綿入かさねつゝ、
書讀まるゝも父母の恩』

賣氷兒

中山幽香

いみじきあつさに草も木も、
ひとも獸もはたどりも、
十許なるわらはへの、
古びし帽子かうぶりて、
うりありくあり裸足にて、
氷買はんとわがよべば、
おし拭ひつゝ重たげに、

そよどの風もあらずして、
うめきくるしむひる最中、
破れし衣を身にまとひ、
氷のはこをになひつゝ、
そもやいかなるひとの子ぞ、
流れ出でくるみのあせを、
力なくくゝ荷をおろす。

ほみはてたる此頃の、
かゝる日中にいかなれば、
身の上如何にかたれがし、
志ゆればやがて萎れつゝ、
思へば去年の秋の末、
つれなき風に誘はれて、
ちりはてましぬあな悲し、
のこり給へるは、上を、
ひたすら頼みまゐらせて、
いかなる縁さきの世の、
今年彌生のなかばより、
ならせ給ひぬは、上は、
神にいのりを幾そ度、
絶えてゐるしはなく／＼に、
貯とてもつきはて、

あな哀れなるわらはべよ、
何しに氷うるなるか、
とどいらつもあらなくに、
語りいでたり涙にて、
あはれみふかきち、上は、
もろくも桐の一葉とぞ、
それより後はたゞひとり、
杖ともすがりはしらども、
つかへたりしがあはれそも、
如何なる報のありてかや、
雙のまなこは露見え、
それより後はひたすらに、
かけしかひさへなさけなや、
日をふるほどにいさゝかの、
今はかまどのけふりさへ、

立てかぬる身となりけり、
朝はしほみひるはかく、
なやみ給へる母上を、
語り終りて童は、
ふたつの頬にそゞぎけり、
不覺に袖をぬらしけり、
少しの金をとりいで、
云ひつゝわれの與ふれば、
おしいたいきて又荷をば、
うしろ姿ぞあはれなる、
いでゆに山にはた海に、
あつさを送るものあるに、
むなしくひとの躰をば、
あつき空をしうちあふぎ、
うりありきゆく生業や、

されば日毎にわれはしも、
氷をうりて不自由に、
養ひまゐらすはかなさよ、
あつき車をはら／＼と、
おなじ情にわれもまた、
ぬれし袖をば絞りつゝ、
たつきの代となせよかし、
童は喜びいく度か、
肩にになひてかへりゆく、
憂きと知らぬ世の人は、
心樂しくこゝちよく、
己がもちゆく氷はも、
冷せど己はかみもせで、
こげしちまたをふみつゝも、
さこそ苦しくあるならめ、

まかはあれどもわらははべよ、
種とし云へばいつの日か、
情を知らぬ世のひとの、
露ななげきそ童よ、
汝が孝なる真心を、
まさしく知りていますなり、
心落しそ其中に、
いましに與へ給ふらん。

くるしきことは樂しみの、
花さく春のなからめや、
よしや汝をすつるとも、
心やすけくあれよかし、
天にまします大神は、
あなあはれなる童よ、
いつかは神も幸報を、

我心

微吟生

玉のうてなに住ひして、
世のおもぬりを受むとて、
なやますひとぞ愚なる。
多くの人のわれをしも、

數多の人にかしつかれ、
かたちの爲めに心をば、
賤しき者よかたゐよと、
指さし笑ふおそましき、

身にはつゝれを纏へとも、
我とは人の知らずして、
誹らば誹れ世のひとよ、
きたなき心はもたなくに、
夕されば

心のなかはにしきなる、
笑はし笑へ世のひとよ、
愆ふかさはのにこり水、
玉のうてなも何かせむ。

木の下かけを宿として、
晨あしたには、
いさゝ川邊にさまよひて、

天照る星を友となし、
けがれし耳を洗はなむ。

藻鹽草

鱧洲漁夫

せめて小蝶に

とりつくるはぬうなるかみ、
風のみだすにまかせつゝ、
野菊かざしてほゝえめる、

里のおとめの罪なさよ

天津乙女ににたるかな。

戀てふものも去らぬ身の、

氣だかき姿みてしより、

たへぬ思ひに沈みけり。

まばしやどらむ花の上、

せめて小蝶に身をかへて。

庭の泉

庭の泉は今もなほ、

湧きつゝたえず流れけり、

戀しき君とふたりして、

あさなき時にくみしごと。

戀ふるひごろの誠をば、

再たび君にくませばや、

あなをほつかなこの泉、

君か心はくみかぬつ。

朝顔

露を命の牽牛花の、

あはれやなにをたのみにて、

うきふしまげき吳竹の、

籬にやさくあさなあさな。

民

長田柳溪

百千鳥囀る春も、

日もすから野らに出で、

水無月の暑き盛りも、

こゝかしこ泥かき寄せつ、

櫻花匂ほへるころも、

春のあら小田鋤返す。

日ぬもすに野らに出で、

ましる莠をぬきすてつ。

紅葉の色つくころも、
日によるに安きまもなく、
雪の花ちりくる頃も、
大君のみめくみうけて、

さを鹿の妻よふころも、
ふくるまでみしぬ菊つむ。
木枯の身にしむ頃も、
寒さも忘れず冬籠りつゝ。

秋の懐ひ

稲葉 蒞 寔

古里を立出てより數れば、
別れしその日我が母が、
かくも短くなる見れば、
可愛のわらべと成つらむ。
可愛の乙女と成りつらむ。
此頃いかにさきにけむ。
此頃の夜はふるさとに、
芭蕉葉を吹くかぜの聲、

夢の間に三年へにけり、
ぬひてたまひしこの袴、
我が弟もいまはさぞ、
我いもうとも今はさぞ、
庭の尾花やをみなへし、
西山松につききのぼる、
いかに楽しく眺むらむ。
淺茅に細きむしの音も、

ふるさとおもふ心には、
はやく錦を着て歸へり、
霞たな引くはるの野に、
緑すいしきなつやまに、
千草花咲くあきの野に、
雪降りまきる冬の日に、
哀れ其日やいつならむ。

いと悲しさを添へにけり。
ふるさと人と諸ともにも、
若菜摘つゝあそばなむ、
清水くみつゝ遊ばなむ、
花をつみつゝ遊ばなむ、
小狗と共にあそばなむ、

わか家

竹 陰

ひろき世界に、
楽しきものは、
こかねのうてな、
住みよからざる、
我が草の家に、

たゝひとつ、
我が家なり、
たまのどこ、
ことなきも、
くらべては、

それのうてなもなになれや、
* * * * *
その小床もなになれや。

とみもくらゐも、
* * * * *
なにかせん、

樂しき我が家ぞ、
* * * * *
千代のすみか、

よしそのいほは、
* * * * *
せまくとも、

ひさをいるゝに、
* * * * *
たるならば。

秋

羽後 湯川 鶴夢

花 薄

夕さびしき秋の野に、
露重けなる袖ふりて、
うきをますほの花穂、
哀れ誰をか招くらむ、

明 月

浮世の塵を他に^{よそ}見て、
神代乍らの冴けさを、
ふけゆく空の秋の月、
仰くたもとに露繁し。

雁の聲

友と相見し夢さめて、
いつこの空と眺れば、
物おもふ床に雁の聲、
たゝすみわたる月の影。

擣 衣

小川を一つ隔てたる、
松吹く風のたえゝに、
妹か軒ばに月さえて、
ころも打つ聲聞ゆへ。

砧

常陸 稻葉 文武

秋の夜風の身にまみて、
寝さめがちなる終夜、

更け行く月に賤の女が、
衣擣つ音ぞ哀れなる。

おち葉

紀伊 中岡 孤舟

山家初冬

冬立つけふのあさ風に、
木々のおち葉に谷川の、

池のかれあし霜見えて、
水もほそりて流るなり。

田家

夕日端山にかけおちて、
ねぐらに歸る村からす、
村の小みちを眺むれば、
急みをうかへて樂しげに、

入あひ告ぐる寺のかね、
聲もあはれに聞えけり、
牛飼ふ子等も賤の女も、
家路をさして歸るなり。



附 録
墓畔の美人

楊菴子作

序

墓畔の美人とは、鹿島櫻卷子のものしたる新體詩なり。題を日清の戦争にかりて、筆を美人想夫のうらみに染む。事がらさまで新らしきにあらざ、趣向はた奇抜なりといふにもあらねど、讀みゆきて、篇章の長きをも覺えざるは、聲調流麗にしてところく人
の至情に觸るゝものあればならむ。とにもかくにも、かゝるおもむきを歌ひたる世上無數の新體詩中、まことにきはすぐれたるものなるべくや。こを打讀みて、心に思ふまゝをかき取るしてよ、と乞ふまゝに、かくは、はかなしごとを志るしつけたるになむ。

霜月のなかば

武島羽衣志るす



室町の美人

櫻 巷 子 作

其 一 (天王寺)

紅葉もみぢみたれて秋くるゝ、
 諸行無常の鐘のねも、
 折しもひとりおき餘る、
 菊の一枝を手にもてる、
 緑のかみはあめすぎし、
 細けき眉はうすがすみ、

天王寺畔のゆふまぐれ、
 折あはれにぞ聞えける。
 道芝のつゆふみわけて、
 若き女ぞきたりける。
 春の野末のあをやぎか、
 にほへる春のとほ山か。

なにを心におもふらむ、
たどへむかたも梨の花、

其二 (新墓)

なにかばくづれし石の垣、
手向の花もまだ枯れぬ、
御前にたむくる花一え、
いともやさしき真心を、
涙ながらにあはす手も、
冥府は蓮のはなのへに、
いづれ逃れぬもとの露、
げにも悲しきこの墓の、
後につづくすぎばやし、
都はなれしところとて、
空もまぐれの雨もよひ、

其三 (練言)

うれひに沈むその様は、
露重げなる風情なり。
左にをれてたわやめは、
新墓にこそいたりけれ。
ひとへに後世を吊へる、
苔のまたなる人や志る。
あはぬ此世はさてもあれ、
同じやどりを占むとや。
すゑの車ときゆる世に、
主はいかなる人ならむ。
墓をめぐるすゝき原、
其淋しさぞたいならぬ。
あたりは霧にとゞされて、

雲井にたかき九重の、
打まづみたる木魚のぬ、
風にこほるゝ松の葉の、
すごきあたりの有様に、
心のうさのかずくを、

其四 (鴨緑江)

ありなれ河に浪たちて、
たいならぬ世の雲行に、
日本鍛工があまたたび、
ありなれ河に洗ひなむ、
枯るゝ高麗野の草も木も、
春の恵をあふきみむ、
はやることろは春駒の、
勇む心はあまぐもに、

其五 (水つく屍)

塔の影さへおぼろなり。
それさへ今は打たえて、
音だにさやに聞つべし。
物おもふ身は堪へ兼て、
語りいでしぞ哀れなる。
鶏の林にかぜさわぐ、
いさむみ國の人ごゝろ。
きたへし劔血にそめて、
時こそきたれ心地よや。
わが日の本の御光に、
時こそきたれ心地よや。
取つなくべき由もなく、
羽うつ鶯にさもにたり。

海と陸との別あれど、
何まよふべき我ゆかむ、
水つく屍はかねてより、
勇む吾夫のよひくくの、
取佩く大刀の束のまも、
いでむ其日をいつしかど、
待つ夜の數の重なれば、
また悲しくもわが夫の、

其 六 (短きちきり)

かくあらむとは兼てより、
また今さらに悲しくて、
鴛鴦の衾のあたゝかき、
生死の境にたゝすとは、
かくと知りせば過し夜の、
千代の契のすゑかけて、

心はおなじきみのため、
道は忠義のひとすぢを、
思ひ定めてありけりと、
ゆめはたいよふ勃海灣。
思ひわするゝ折はなく、
まちし心ぞいさましき。
いつか卯月の嬉しくも、
たゝむ其日は定まりぬ。

思ひ定めてありけれど、
さきだつものは涙なり。
夢も三年はみざりしに、
夢かうつゝかまぼろしか。
ぬざめの床のあかつきに、
語りつくしておくべきを。

つもる思のかずくは、
思ひたゆたふ其中に、

其 七 (かたみの言葉)

こゝろ強くは坐しても、
夫もかなしき色みえて、
なれの嘆きは我志りぬ、
賤のをだまき今さらに、
御言葉は只こればかり、
こもれるふかき真心は、
をりしも宵の雨やみて、
血になく聲のほとゝきす、

其 八 (横須賀港)

夫の船出をおくらむと、
みどりはてなき空と海、
はやしのごとき帆柱の、

今日か語らむ明日いはむ、
立むは今宵となりけり。

別れとなれはさすが亦、
のたまひいでし言の葉は。
われの心は汝志らむ、
何くり返すことかある。
されどそれなる一言に、
われならで又誰志らむ。
夕月くらきおほそらに、
今なほ耳にのこるなり。

横須賀港にきてみれば、
つゝくあたりは朝鮮か。
高きや吉野ひくきなに、

かぞへつくさぬ軍艦、
その大艦のみぎひたり、
わが夫の乗るはその中の、
出でむまうけを今かする、
心ありげにもろこしの、

其 九 (望夫石)

笛のぬ四方に聞ゆれば、
あまたの艦は動き出ぬ、
艇のなかなるあはれ夫、
こゝ迄きにし吾ありと、
船はみるくゝわたの原、
ひとすぢのこる黒煙、
波路の末をまもりつゝ、
石になりぬるいにしへも、

其 十 (夫の心)

あな勇まし舟よそひ。
木の葉を浮けし水雷艇、
いづれの艇にあるならむ。
吐きだすふねのくろ煙、
方に齊しくなひきけり。

また一志きり吐く煙、
艦は韓國にむかひつゝ。
君を慕ひてはるくゝと、
知るや知らずやいかならむ。
沖つ波まにきえはてゝ、
恨をひきていとながし。
たちさりがたき別路に、
げにこそ思ひ知られけれ。

松はみどりに砂まろき、
あはれ吾夫は立かへり、
雲井に舞ふや鴉のこゑ、
胸にかざりて横須賀に、
かぬてちぎりし吉野山、
花の木蔭におもしろく、
かぬてちぎりし箱根山、
涼しき温泉に樂しくも、

其 十一 (空 闌)

波路をわけてわが夫の、
空しき闌のひとりねに、
ねやのひまもる月の影、
ねられぬ床に長きよの、
あられ窓うつ夕まぐれ、
韓野の寒さ身にまめて、

やまと島根の磯のさき、
亦見むことゝ思しけむ。
たかきいさをの勳章を、
また返らむと思しけむ。
かへらばわれを伴ひて、
春くらさむと思しけむ。
かへらはわれを伴ひて、
夏すごさむと思しけむ。

たゝしゝのちの年月は、
うき事のみぞ多かりし。
まくらに近き虫のこゑ、
曉まちし夜やいく夜。
雪折まげきふゆのよに、
いをねざりつる夜や幾夜。

あはれ吾夫も風さゆる、
三笠の山どうたひいでし、

其十二 (他の譽)

わが御軍のいさをしは、
平壤城のときのこと、
おなじうみなる御軍の、
それに乗らせる吾夫の、
雄々しき夫の何しかも、
はや一年のなみまくら、
あな口惜しと朝ゆふに、
ながむる空に雁がぬの、

其十三 (一字一涙)

あはれそれなる玉章の、
嬉しき事かあるはまた、
取る手遅しとよむ文の、

勃海灣のつきかげに、
眺めし夜半もおはしけん。

黄海の上のつゝのおと、
高く世にこそ聞えしか。
つらにつらなる水雷艇、
なぞて功績の聞えぬぞ。
功を人のうへにみて、
空しく結びたまふらむ。
こゝろにかけし峯の雲、
音信はやうく来りけり。

中のことろは何ならむ、
悲しきことにあるるか。
文字は吾夫の筆ならで、

あらぬみるめの浦島が、
一たびよみし折はまだ、
ふた度よみしその折は、
待ちし功績はたてぬ共、
あなうらめしき玉章や、

其十四 (玉章の一)

あまたのやぶれに黄龍の、
くぢけやうせし敵艦の、
わが大艦のゆきかひに、
はつる港のさきくゝに、
雲井うごかす砲のおと、
我はこゝをも落さむと、
名にきこえたる威海衛、
やまのはちかき夕日影、

其十五 (玉章の二)

あけてくやしき玉手箱。
夢うつゝともわき難く、
胸は思ひにあふれつゝ。
君しなれば何かせむ、
あなかひもなき玉章や。
雲を凌がむいきほひも、
すがたはたえぬ黄海に。
いむかふ浪も今はなく、
てりこそわたれ日の御旗。
うみをおほへるくろ煙、
昨日もけふも舟いくさ。
いかに守はかたくとも、
落ちむはまたしく隙ならむ。

よるは志づけき威海衛、
月影いつかかたむきて、
浪の底をやくしりけむ、
ふせぎきびしき灣内に、
まへに聞ゆる浪の音や、
うしろにきこゆる浪音や、
折しもものみの電燈は、
夜たつ虹とみるまでに、

其十六 (玉章の三)

海人のたく火か星影か、
みえつかくれつ海中に、
それとさだかにわかぬども、
あたりとこそは覺えたれ、
あはれ吾隊のつばものや、
生くるも死ぬも白波に、

いままでありし弓張の、
あらしは黒く波まろし。
御空よりやは降りけむ、
乗りていりたる水雷艇。
さきにすゝみし一艇か、
おくれて進みし一艇か。
一道やみをつらぬきて、
千里の海をてらすなり。

それかあらぬか立浪に、
たゞよふ一つの光あり。
かしこや敵の艦はてし、
進め光を志るべにて。
遅れて人にわらはるな、
任し果たる身ならずや。

いふは此隊の長ならむ、
兜に香をたき志めし、

其十七 (玉章の四)

稍近づきてさきにみし、
艦とみてしは艦ならで、
艇をやうくこぎよせて、
山とみてしは山ならで、
喜びいさむつばものは、
設けををへし折しもあれ、
われよりはなす水雷の、
心がまへやあたりけむ、

其十八 (玉章の五)

雲井にはなさく榴散弾、
かのいさましき艇長の、
見るもあはれや艇の上は、

闇にもかやく晴の衣、
ためしにも似て哀なり。

光のあたりみわたせば、
小山の影にさも似たり。
仰ぎて見ればこはいかに、
まことに敵の艦なりき。
かれ砕かむと水雷の、
合圖の聲こそ下りけれ。
聲速し遅しかなたにも、
ひとしく轟く砲のおど。

雨とばかりに降くれば、
姿はみえずなりにけり。
たつ田の紅葉とみるまでに、

あかき心をのこしたる、
彼方は如何にと眺むれば、
潮のけむりにこれも亦、
やがて其波まづまれば、
まづみはてたる帆柱の、

其十九 (夕の雨)

語るうらみの數々も、
あらしばかりぞおくつきの、
折しも二ひら亦みひら、
ちりかゝりたる紅葉の、
涙はらひてたわやめが、
あまる心のかなしみは、
あたりは暗くなりゆきて、
されどあはれの彼をみな、

血汐はみちて流れけり。
さかまきのぼる波萬丈、
艇の姿はきえはてぬ。
あはれ敵艦影もなし、
末のみ浪にあらはれて。

あはれときかむ者とは、
松の梢にすさぶなる。
心ありげにおくつきに、
血汐の色もあはれなり。
さゝぐる水の一杯に、
誰か哀れとくまざらむ。
雨さへ今はこぼれきぬ、
猶去らむともせざりけり。

白菊につれなくも風のくれ残る

暉吟

明治廿九年十一月廿七日印刷
明治廿九年十一月廿七日發行

定價金拾錢

編輯兼
發行者

佐藤儀助

東京牛込區長延寺谷町六番地

印刷者

愛敬利世

東京牛込區加賀町一丁目十二番地

印刷所

株式會社 秀英舍 第一工場

東京牛込區加賀町一丁目十二番地

發行所 新聲社

東京市牛込區長延寺谷町六番地

●投書募集●

青年

機關

新聲

第壹卷

第五號

十一月十日發行

●每月一回發行 ●一部前金五錢 ●郵税五厘宛
●投書切毎月廿五日 ●字跡正楷一行廿四字詰

新聲の本領

天下の大勢は我が社をして沈黙の徳を守ると能はざらしめ、慨然『新聲』を發刊するや、大に江湖の喝采を博し、四方の贊襄を得、每號版を重ねると三回以上に及び、今や誌友東西を通し南北に亘り、二萬の多數に達し、重きを文壇に占むるに至れり。蓋其本領とする所は、青年社會の元氣を鼓舞し、志氣を獎勵し、風儀を矯正するに勉むると共に、江湖青年諸君の錦心繡腸より出づる、筆墨淋漓の論文、氣韻生動の詩歌、情致精妙の小説を掲載し、以て其の鬱勃たる情懷を吐かしめ、之れを社會に紹介せんとするにあり、要するに、『新聲』は青年諸君の爲めに生れ、青年諸君の手に成る青年雜誌なり。

氣月趣露
稜皎津團
片

々々々々々

設欄要旨

是れ我社の懷抱を述べ、本領を明にする所に於て、侃々諤々青年の指導者となり、直筆讜言天下の積弊を打破せんことを勉む。投書中の最も優等なるものを收む。論文あり、小説あり、隨筆あり、紀行あり、皆才華煥發文情燦爛、自ら一特色を存す。詩は大沼鶴林、歌は鹿島櫻菴、俳句は碧梧桐等の諸名家の嚴正たる校閲を経て掲載す。新詩は我が社の最も力を盡くす所。満天下の少年諸君の寄稿を掲ぐ、投書家獎勵法なるものありて、六ヶ月毎に投書家の優等なるものを、數名を選びて賞品を呈す。「けふ此ころ」一學海の風光の二に分つ、一は文壇の消息を傳ふることに最も精細、一は學海の光景を叙すること、頗る鄭寧。

諸新聞の批評

日本新聞評 青年文壇の聲なり、活氣燃ゆるか如く直筆直到の處頗る愛す可し。用紙不長ならず、軀裁亦整ふ、唯努めて倦まざれば今日の新聞はやがて明日國民の大聲たるべし、自愛せよ。
國民新聞評 日清の役は戦争の「序幕」のみ波瀾萬丈の「大切」は將來來らんとす。而して此「大切」の衝に當る者は青年を描いて又誰かある。『新聲』は此青年が揚ぐる叫の聲なりとぞ。未だ熟せざる所あるも生氣横溢の概あり、幸に自愛せよ。
萬朝報評 青年諸子の筆になるもの、中に大に見る可きものあり。
山陰新聞評 半は文壇の時評と新詩を收め半は少年の作文を掲ぐ、蓋中學々生の伴侶として適當なるべし。印刷の鑄明なる軀裁の整然たる有數の雜誌なり。
防長新聞評 新進文人に馳騁場を供す、小説小觀詩話見る可し。

發行所

東京市牛込區長延寺谷町六番地

新聲社

發賣所

東京市京橋區瀧山町一番地

桃

華

堂

特約大賣捌所

東京 神田
東京 銀座
攝津 大阪
攝津 大阪
攝津 大阪
攝津 大阪
攝津 神戶
攝津 神戶
尾張名古屋
尾張名古屋
山城 京都
甲斐 甲府

東京 堂
文海 堂
岡島新聞 舖
盛岡 文館
吉岡 平助
柳原喜兵衛 堂
熊谷久榮 堂
吉岡 支店
川瀨 代助
三輪伊六 房
東枝律書 房
柳正堂

下總 千葉
常陸 水戸
信濃 松本
陸前 仙臺
羽後 秋田
羽後 角館
出雲 松江
備前 岡山
土佐 高知
肥前 佐賀
肥前 長崎
肥後 熊本

多田屋支店
川又銀藏
水琴堂
木村文助
成見清兵衛
鎌川與市
川岡清助
武內彌三郎
澤本駒吉
河內汲古堂
虎與次
長崎次郎